

4. 明建神社と東氏文化の地にみる歴史的風致

(1) はじめに

郡上市大和町の歴史は、縄文時代をはじめ多くの遺跡や遺物が町内各地で発見されており、6世紀頃にはすでにヤマト王権とつながりをもつ豪族がいたと考えられている。そして、大和地域を特徴づけるのが、承久の乱（承久2年（1221））の戦功によって、下総国より入部した千葉一族の東氏であり、約340年間にわたり郡上を統治したことである。東氏は代々武家の歌人として有名で、郡上東氏の初代・胤行は、御子左家の藤原為家に師事しその娘を妻にしたと伝えられている。九代・常縁は、連歌師・宗祇に古今伝授を行ってこれを確立し、「古今伝授の祖」といわれている。また、応仁・文明の乱（応仁元年（1467）～文明9年（1477））の最中に郡上東氏の居城であった篠脇城が斎藤妙椿によって落とされるが、常縁は十首の和歌を詠んで斎藤妙椿に贈り、無血のうちに城が返還されたという逸話が残されている。このため、郡上東氏の足跡及び文化をたどることができる地となっている。そして、郡上東氏によって建立された明建神社で奉納される七日祭や披露される薪能は、郡上東氏の足跡を今に伝える文化といえることができる。

(2) 建造物

① 明建神社

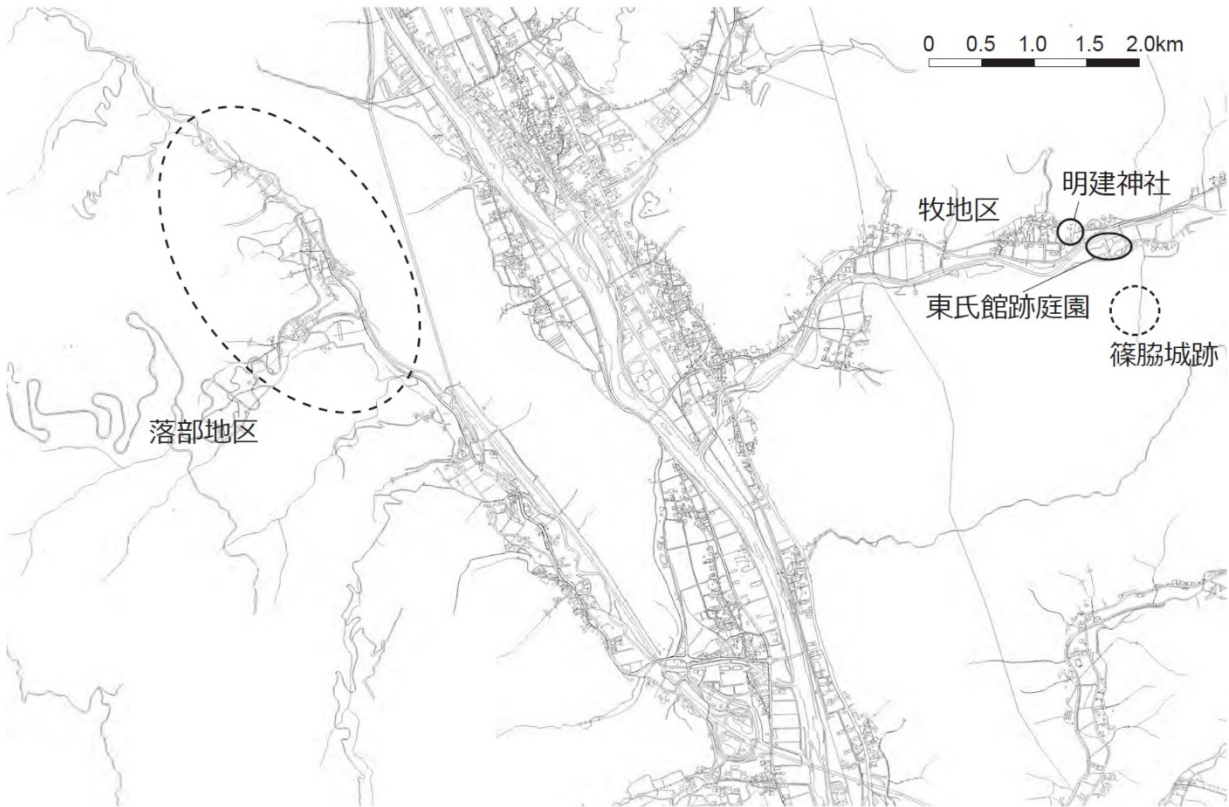
明建神社本殿【市重要文化財（建造物）】

明建神社は、郡上市大和町中央よりやや東側に位置する。国道156号徳永地内から東に折れ、2kmほどのところにあり【2-4-1】、長良川の支流栗巣川の北側にある明建神社の社叢は県天然記念物【2-4-2】となっている。栗巣川の南側には、篠脇城跡（県史跡）【2-4-3】と中島を配した池泉回遊式の東氏館跡庭園（国名勝）【2-4-4】が位置する。

下総国の千葉氏の一族である東胤行が、承久3年（1221）の戦功により香取郡東庄（現千葉県香取郡東庄町）に美濃国郡上郡山田庄（現郡上市大和町、白鳥町・八幡町の一部）が加領され、郡上東氏が阿千葉山（大和町剣）に阿千葉城を構え、郡上での郡上東氏の時代が始まった。さて、明建神社は、東氏代々の守護神である妙見菩薩を、13世紀に下総国から勧請し、阿千葉城の南に建てられたと伝えられる神社である。

鎌倉時代末期、第4代東氏村（正中2年（1325）～天授3年（1377））が大和町牧にある篠脇山に居城を移した際、明建神社も大和町牧に移転した。その後、天文10年（1541）東氏の居城が赤谷山城（八幡町島谷）へ移っても、明建神社は同地にとどまった。江戸時代までは妙見菩薩を祭神とし、妙見神社と呼んでいた。明治の神仏分離により、表向きは祭神を国常立尊とし明建神社と改めたが、現在も妙見菩薩を祭神としている。

明建神社の社叢（県天然記念物）は、横大門といわれる横参道の脇に2本の大杉が立つ。鳥居から本殿へ向かって左側が「神帰り杉」といわれる大杉で【2-4-5】、横大門の両側には、篠脇城付の馬場跡といわれる桜並木が続く【2-4-6】。「神帰り杉」から230m余り先へ行くと「神迎え杉」がみえる。



2-4-1 牧地区と落部地区 位置図



2-4-2 明建神社社叢



2-4-3 篠脇城跡



2-4-4 名勝 東氏館跡庭園



2-4-5 神帰り杉



2-4-6 桜並木 馬場

「神迎え杉」の手前で左折し、表参道（^{たてだいもん} 堅大門）を通り、100mほど先に拝殿（天保13年（1842）再建棟札）、その奥に本殿【2-4-7】が配され、本殿は文政5年（1822）の再建である。

明建神社本殿は、石積みの上に構えており、正面に門を設けた瑞垣で周囲を囲われている。桁行3間、梁間2間、1間向拝を設け、切妻造平入銅板葺の屋根を前面に葺き下ろす。拝殿は、桁行6間、梁間4間、入母屋造平入で正面は吹放ちとなっている【2-4-8】。



2-4-7 明建神社 本殿



2-4-8 明建神社 拝殿

②東氏館跡庭園【国名勝】

当地を治めた郡上東氏の居城であった篠脇城跡については、以前から知られていましたが、郡上東氏が起居した館跡は所在がわからないままであった。昭和54年（1979）6月、牧地区の圃場整備工事中に、字志ノ脇において中世の陶器片が多数出土し、建物の礎石らしい石の並びも認められたので、現地調査の結果、郡上東氏の館跡であることが確認された。昭和55年（1980）から昭和58年（1983）の4ヶ年にわたる第一次発掘調査が行われ、灰釉陶器や中国製陶器片も数多く出土し、郡上東氏の生活の文化的高度さをうかがい知れるようになった。また、池を中心として庭園遺構が発見されて、この館跡が中世の武将であり、代々和歌の名門であった郡上東氏の館跡として貴重な遺跡であることが認められ、昭和62年（1987）に国の名勝に指定された【2-4-9】。

その後、平成元年（1989）に第二次、平成4年（1992）に第三次の発掘調査を行い、全貌が明らかになった。復元工事は、平成元年度から4年度にかけて三段階に分けて行われた。池泉庭園の遺構は、石組がほぼ完全な形で発掘されたので、一部護岸の石を補い風化防止処理を施した以外は発掘時のまま保存されている。また、庭園西部に築地塀の基礎と思われる石列が検出されており、土塁状に盛土して築地塀を表現している。池泉部以外の庭園は、すべて真砂土で盛土・張芝し、植栽して景観を添えた。



2-4-9 東氏館跡庭園

③篠脇城跡【県史跡】

14世紀初め頃、郡上東氏第4代氏村は、大和町牧地内に居館や山城を築いた後に、阿千葉城から拠点^しを牧字志ノ脇^{のあき}の山頂（570m）に移したとされている。郡上東氏がこの山城にいた時代が最も栄えた時代で、その勢力は気良庄（明宝・和良方面）や吉田庄（美並方面）へ伸びていったと考えられる。応仁2年（1468）、美濃国守護代齋藤妙椿と第9代東常縁の逸話は、第1章の歴史的環境にて記載したとおりである。しかし、天文9年（1540）第11代東常慶の代に、越前朝倉氏が篠脇城を攻め込んできたのを撃退したが、これを機に翌年に現郡上市八幡町島谷地内の赤谷山城（郡上市役所の南東にある山城）を築いて居城としたため、篠脇城は廃城になったとされる【2-4-10】。

篠脇城跡の最大の特徴は、山頂は、三段の平地をなしており、その最上段約100㎡の平地の主郭がある。それより、約4m下ったところが二の曲輪である。さらに、その下の帯状の平地は、横堀と思われ、麓から攻めのぼる敵勢に対する防御施設が配されている。城郭を囲んで放射状にみられる30数本の畝状空堀群は、長さ10～40m、深さ約2.5m、上幅7～8m、底幅2mの規模である。放射線状にみられるこの空堀は、その形が靱すり臼の目のようになっていてところから、通称「臼の目堀」と呼ばれている【2-4-11】。

令和2年度から行われた篠脇城跡の発掘調査では、従来齋藤妙椿の攻撃で灰燼^{かいじん}に帰したと考えられていたが、建物の大きさや場所は不明ながら、建物の柱を立てた石（礎石）から、山上の曲輪には礎石建物の居館が建っていたことが判明した。また、元々の地形を掘り込み、巨石やその周囲に小型の石を配置する状況などは、池状遺構と考えられ、東海地域で最古級のものであると判明した。また土塁を掘削し、断面を観察したところ、元々の地形に土を盛って平らな場所を造り、その上に大型の石を配置し、土塀が建てられていたと推測されている。その後、土塀を取り壊し、その上に土を盛って新たに土塁が造られていた。大型の石を2箇所^{2ヶ所}に配置し、その脇に小型の石材を横長に据え、垂直に積み上げた石垣が確認されている。2ヶ所の大型の石の間は、上段の曲輪への出入口と推測されている。発掘調査報告書が令和5年度中に刊行予定ではあるが、改めて篠脇城の位置付けは大きく変わる可能性がある。



2-4-10 篠脇城跡



2-4-11 篠脇城 遺構配置図

④ 慈永大姉墓【市史跡】

大和町牧字内垣津地内にある石造りの宝篋印塔^{ほうきょういんとう}で、高さ 89 cm、室町時代のものと考えられている。その両側には明治 36 年（1903）建立の東氏代々の墓 2 基が立っている。従来、この墓は常縁夫人の墓と伝えられていたが、慈永大姉は、下総守東尚胤^{とうなおたね}の母であり、尚胤は東氏系図に元胤^{もとたね}の子となっていることから、元胤夫人の墓と考えられている【2-4-12】。



2-4-12 慈永大姉墓

(3) 歴史的風致を形成する活動

① 七日祭【県重要無形民俗文化財】

明建神社では、七日祭という、旧暦の 7 月 7 日（現在は月遅れの 8 月 7 日）に行われる例祭がある。記録では元禄 6 年（1693）「祭礼執行之儀式」の下書が最も古く、寛政 6 年（1794）～慶応 2 年（1866）の届出などでも確認できる。

明建神社の宮司を中心とした 19 家の宮座と呼ばれる世襲的な祭祀組織の者と氏子の牧地区が行う。但し、神輿を担ぐ 4 名は牧地区より離れた落部地区^{おちべ}在住の氏子が奉仕することとなっている。現在の神輿は、「万留帳^{よろずとめちよう}」によると安政 3 年（1856）再造である。

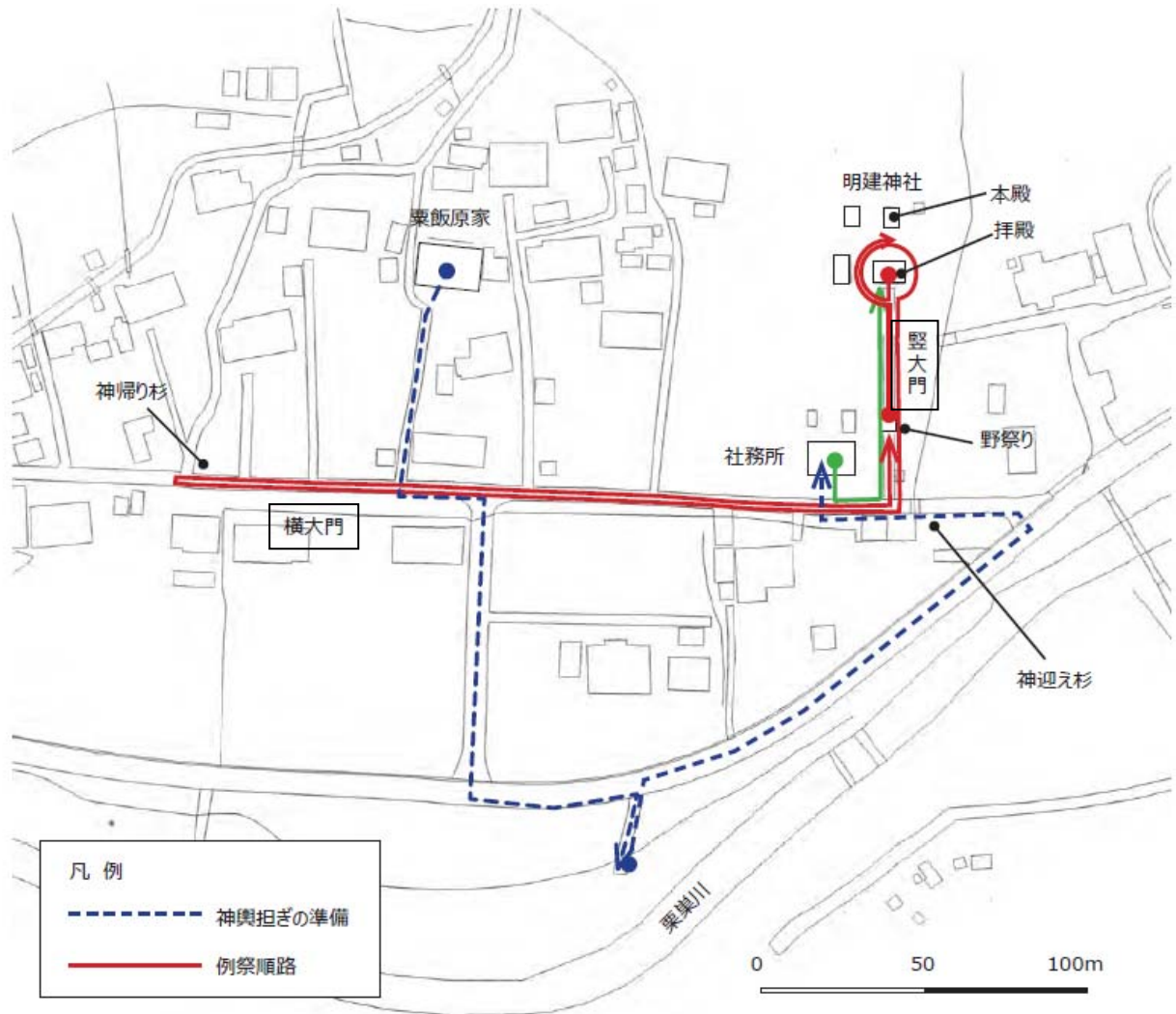
七日祭は、その準備から始まり、8 月 1 日には宮座の構成員が、供物のどぶろくの醸造を行う。5 日午前中に、氏子全員で、境内の清掃、横大門の下草刈り、幟立などの「ミヤクサウチ（宮草打ち）」を行う。5 日午後には社務所に集まり、祭具の破損部修繕や、御幣などのヤワイ（郡上の方言で「準備」のこと）を行う。5 日夜には粳米を練って作った団子を笹の葉 5 枚でくるみ、藁で結び、鍋で煮る、笹巻造りを行う。笹巻は元禄の「差上状」にもある伝統的な供物である。また、役者や氏子総代は 1 日から当日まで水垢離をとり、精進料理を主とし、酒色を断つ。神輿舁き（神前の舞の役）の代表は正月 7 日に神社に詣でる。

祭事次第は以下の通りである【2-4-13】。7 日午前に落部から神輿舁きの 4 人が御神酒を持参し、栗巢川で水垢離をとると、社務所で衣装に着替えて待機する。牧地区の役者も自宅で沐浴後、社務所に集合し、衣装に着替えて待機する。

7 日午後、一行は社務所を出て、竪大門を進み、手水で浄めて拝殿に向かう【2-4-14】。神座に向かって左側に献幣使、来賓、氏子総代、右側に宮司（禰宜^{ねぎ}）、小禰宜、祝、餅つき等、中央手前に神輿舁き、鼻高、笛吹等が着座する。



2-4-14 順番に手水をする行列



2-4-13 配置と順路

神前の儀、修祓、宮司一拝、役者による献饌（奏楽 妙見囃子という）、宮司祝詞奏上、玉串奉奠、役者による撤饌（奏楽）、神前直会、遷霊（奏楽）を本殿前で神遷しの祝詞を奏上し、御神体（御幣）を拝殿中央に移された神輿に奉遷する。続いて、神輿渡御では、神輿舁き4人が神輿を肩にすると拍子音頭取りが音頭を発して、笛と太鼓が道行の囃子を奏し、外で待機していた篠葉踊り子（8人）が応じる。拝殿を降りた一行は、露払いを先導にして拝殿を右回りに3回巡る【2-4-15】。行列は、3回巡ったあとに表参道である堅大門へと進み、露払い、幣持ち、献幣使、氏子総代、弓持ち、神輿舁き、拍子音頭取り、杵振り、笛吹き、太鼓打ち、太鼓担い、鼻高、獅子、篠葉踊り子、給仕の順番で渡御する【2-5-16】。



2-4-15 拝殿周りを巡回する一行

そして、堅大門から横大門の道行となり、神輿は車に乗せられる【2-5-17】。神輿が横

参道である横大門を通り【2-4-18】、「神帰り杉」から還御に移る【2-4-19】と笹葉踊り子が笹竹で獅子を打ち、獅子は勢いよくその笹葉を噛もうとして激しく舞う【2-4-20】。平静になった獅子は横大門へと戻る【2-4-21】。



2-4-16 横大門 渡御



2-4-17 車に乗せられた神輿



2-4-18 横大門を通る行列



2-4-19 「神帰り杉」から還御



2-4-20 還御での獅子と笹葉踊りの子



2-4-21 横大門に戻る一行

神輿は横大門を戻り、神迎え杉の手前で左に折れ、鳥居をくぐる。神輿は鳥居の先に設けた野祭りの祭場上座に安置され、獅子は寝床岩に安置される【2-4-22】。そして、一行が祭場に着座すると、給仕によりどぶろくが注がれる。

野祭りの芸能は、神輿舁きによる「神前の舞（神踊り）」、「杵振りの舞」【2-4-23】、「獅子起こしの舞」【2-4-24、25】が奉納される。各演目の曲が、東氏館跡庭園や篠脇城跡へと響き渡っていく。各演目の野祭りが終わると、一行は列を組んで帰社し、御神体を本殿に奉還して神事を閉じ、集会所で直会が行われる。



2-4-22 獅子の寝床岩に獅子頭を安置する



2-4-23 杵振りの舞



2-4-24 獅子起こしの舞（鼻高）



2-4-25 獅子起こしの舞

②薪能「くるす桜」

七日祭の晩に明建神社で薪能「くるす桜」が奉納される【2-4-26】。昭和54年（1979）に篠脇山の麓で郡上東氏の居館跡が発見され、昭和62年（1987）に国の名勝に指定されたのを契機に、会員200人余が集まり「東氏文化顕彰会」が発足し、短歌大会や学習会などが行われるようになった（同会は現在解散している）。その中で、郡上市八幡町の村瀬家に所蔵されていた謡曲本「久留春桜」を原本として、能を上演しようという機運が高まり、昭和63年（1988）に、京都の能楽師・味方健氏らの手によって



2-4-26 薪能くるす桜

能「くるす桜」が誕生した。さらに大和町では商工会青年部が中心となり、有志を募って

薪能くるす桜実行委員会を結成され、同年8月7日の夜、明建神社の拝殿ではじめての薪能「くるす桜」が上演された。その後、毎年上演されている。

曲「くるす桜」は、白山の僧が都へのぼる途中、妙見宮に立ち寄る。そこにあらわれた老翁から、この地のいわれや杉木立の中のくるす桜のことなどを聞く。その夜、花の下で仮寝をする旅の僧の夢に、さきほどの老翁が衣冠を整えた姿で再びあらわれ、みずから東常縁であることを明かし、和歌の真を語り、いにしへの優美な「大和舞」を舞って消えていく。東の空が白んで目覚めた僧の前には、常縁の姿はなく、桜の花が雪のように舞い散るばかり。ただ、常縁が「植ゑ添えよ花の種、色添えよ心の花」と切実なまでに繰り返し訴えた言葉が、僧の耳に残るという作品である。役者は、明建神社から篠脇城跡や東氏館跡庭園へと臨み、そして薪能の音はこれらの地へと聞き届けられる。

この薪能を行う舞台の篝火には、「白山の火」「千葉家の火」、そして「篠脇の火」の3種が点される。「白山の火」は、白山山系頂上で太陽の光から点火する。「千葉家の火」は、コラムにて紹介をするが、東氏に所縁のある千葉家より分火していた。そして、「篠脇の火」は、国名勝東氏館跡庭園で太陽の光から点火する。これらの火を明建神社に供える「御燈移し」という行事を、多くの市民が参加して行われている。

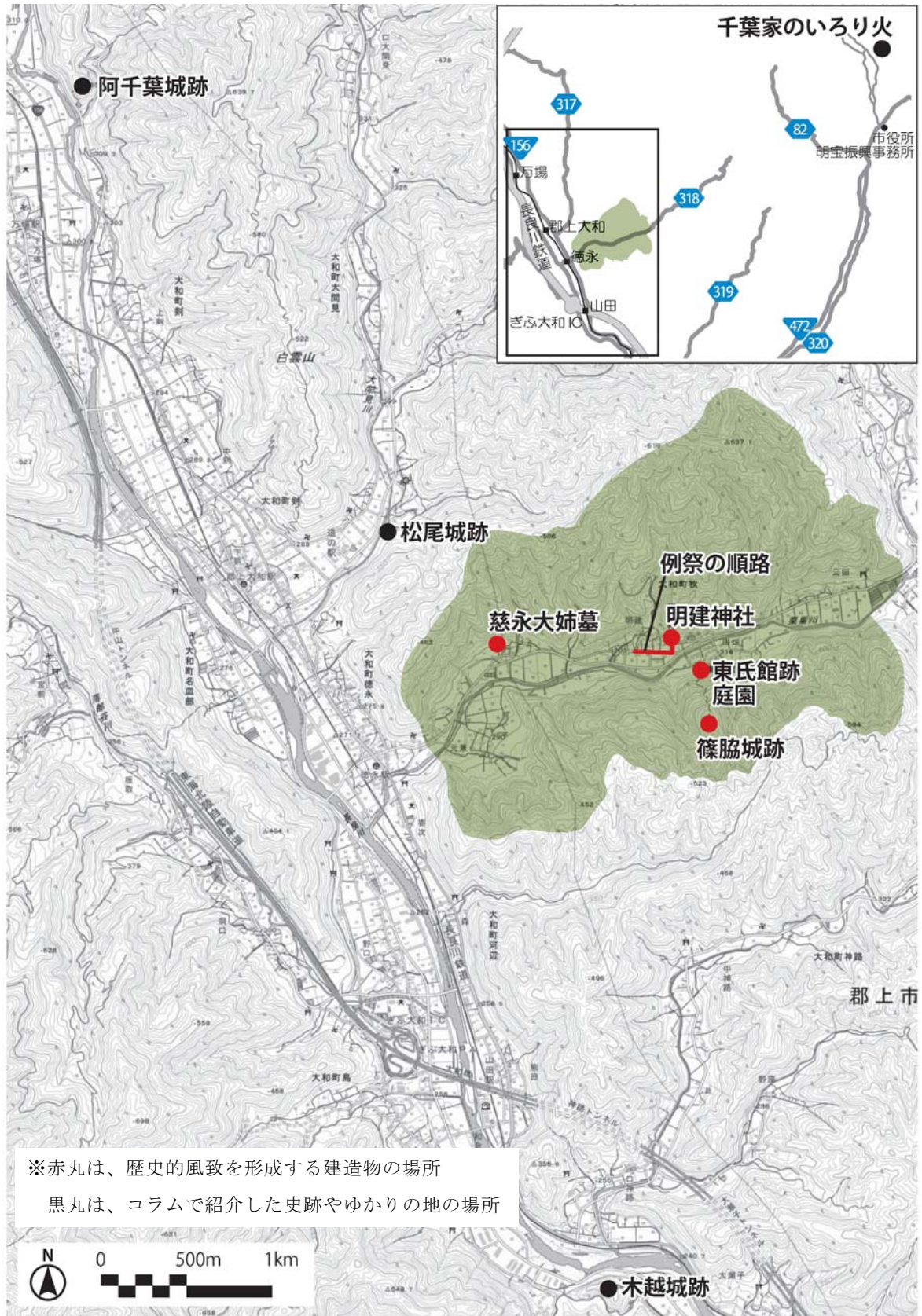
(4) おわりに

中世に郡上を治めた郡上東氏によってこの地に移された明建神社と周囲の東氏ゆかりの篠脇城跡や東氏館跡庭園などは、中世郡上の中心的な場所であった。中世末期以降は、現在の八幡町へ移っていったが、その後も明建神社の祭礼は、大和町牧及び落部の人々によって受け継がれてきた。そして、牧地区の集落に流れる水路に沿った横大門は、神帰り杉から始まり、桜並木の外側には山林を背景とした集落景観が広がる。横大門を進み、神迎え杉が見えてくると、鳥居が左手に現れ、竪大門へ折れ曲がると明建神社の社叢に囲まれた中に、野祭りの会場となる参道の階段とその奥に拝殿が見えてくる。

夏の盛りに、深い緑に囲まれ、要所にいわれのある杉木立を配した明建神社で行われる七日祭は、中世に郡上を支配し、古今伝授という和歌の文化に明るい郡上東氏が居館を築いた地で受け継がれている。また、七日祭の後に行われる薪能は、東氏館跡庭園の国名勝への指定を契機として、地域の歴史を特徴づける事績を再発見し、新しい伝統をつくっている。また、薪能には地元の小学校も含め参加していることから、地域の文化や歴史の継承に大きく寄与している。

一方で、郡上東氏ゆかりの地である篠脇城跡や東氏館跡庭園などは、特に庭園が昭和末期になってその全貌が判明したことで、これまで解明されていなかった中世の郡上を詳らかにされるようになった。また、令和2年(2020)から行われた篠脇城跡の発掘調査によって、これまで確認されていなかった城内での池状遺構、茶の湯や酒宴で使用されたと思われる陶片や土師器が発見されるなど、中世郡上東氏研究の新たな一面を飾ることが期待されている。

このように明建神社及び東氏文化のゆかりの史跡等が一体となって七日祭や薪能を演出し、東氏の歴史や文化が中世郡上を物語るにふさわしい歴史的風致を醸し出している。



地理院地図（国土地理院）に歴史的風致の範囲、要素を追記して作成

2-4-27 明建神社と東氏の文化の地にみる歴史的風致の範囲図

コラム 郡上東氏の関連する城跡

大和地域には、郡上東氏に関する篠脇城跡以外にも重要な城跡が残されており、ここでは3つの城跡を紹介する。

①阿千葉城跡【市史跡】

郡上東氏が承久3年(1221)に郡上郡山田庄を加領されて郡上に入ったときに、現在の大和町剣(上剣)の、通称赤歩岐の山頂に城を構え、以後3代約90年間にわたり山田庄を統治した。山頂に約1,050㎡の本丸跡、更に北方に3mほど下って約500㎡の二の丸跡、尾根つづきに堀切がある【2-4-28】。

郡上東氏が篠脇城に移った後は、鷲見氏がここを居城としたが、天文10年(1541)鷲見貞保のときに、篠脇城主東常慶に攻め落とされ、以後廃城となった。この城は、武家でありながら、歌道の誉れ高い郡上東氏の郡上来治最初の居城跡であり、また鷲見氏最後の居城跡として、中世山城の面影を残している。



2-4-28 阿千葉城跡

②松尾城跡【市史跡】

篠脇城の西北上保筋の固めとして、大和町大間見字城山に郡上東氏の一族野田氏が居城したと伝わっている。松尾城は、中世の城に特有な小規模な搔上城である。標高は約310mの平地で本丸跡と考えられ、一段下った二の丸跡は、現在開墾されているが、一部は往年の面影を留めている。なお、北側に平重積の石垣が残っている。康応2年(1390)年3月、城主野田氏とその郡上東氏との間に争いが生じて落城し、以後は廃城となったが、当時篠脇城の出城として重要な存在であった【2-4-29】。



2-4-29 松尾城跡

③木越城跡【市史跡】

15世紀末に篠脇城東元胤が、末弟の遠藤盛胤を長良川筋の押さえとして、現大和町島(場皿)の北端の山頂に城を構えさせたのがはじまりであり、以後5代90年間遠藤氏が居城した。この山道の途中に木戸跡らしい礎石がある。木戸内はそれぞれ幅8mの細長い平地が左右に延びている。右側の平地は約30mの段をつくり、崩れた石垣が残っている。頂上の



2-4-30 木越城跡

平地はかなり崩れているが南北の長さ 41.5m、東西の幅 11～15mである。北側、西側は険しい岩山で、南側には麓まで達する縦堀が 1 本ある。

天文 9 年（1540）の越前朝倉氏の篠脇城への攻め込んだのときは、木越城主遠藤胤縁が弟盛数とともに宗家を助けた。永禄 2 年（1559）に郡上東氏滅亡後は、遠藤盛数が郡上郡を支配すると木越城は盛数の子の胤俊が入った。天正 16 年（1588）、小牧・長久手の戦いで、遠藤胤基は郡上八幡城主遠藤慶隆に従い、織田信孝に与したことで豊臣秀吉より加茂郡犬地へ移封を命じられ、木越城は廃城になった【2-4-30】。

コラム 古今伝授を今日に伝える施設と関連行事

明建神社の隣には、平成 5 年（1993）に開園した野外博物館「古今伝授の里フィールドミュージアム」は、中世の郡上を治めた郡上東氏の東常縁が『古今和歌集』の解釈等を師から弟子へ秘説相承の形で伝える“古今伝授”の祖と呼ばれたことから、和歌をテーマとして東氏ゆかりの文化遺産や周囲の自然も一体的な保存や活用をコンセプトしている【2-4-31】。



園内には、国の名勝東氏館跡庭園や県史跡篠脇城跡をはじめ、東家から寄贈された和歌関連の資料や庭園跡で発掘された出土品を展示する「東氏記念館」、和歌文学史を視覚的に楽しみ学べる展示となっている「和歌文学館」、歌書や歌集を閲覧できる島津忠夫文庫・講演会や展示会等が行われる研修室・学習室・カフェ・ショップ等多目的に利用できる「短歌の里交流館よぶこどり」などがある。

古今伝授の里フィールドミュージアムでは、郡上東氏ゆかりの文芸である、和歌・短歌の普及を図るための関連行事を開催している。近年の取り組みとして、令和 3 年（2021）年に、千葉氏の一族である東氏が承久の乱の戦功による郡上の地に加領されて 800 年目をむかえた。加えて、9 代目の東常縁が、宗祇へ古今伝授をしてから 550 年目の年でもあった。このことから、この 2 つの歴史的な節目をむかえたことを記念した「郡上東氏 800 年・古今伝授 550 年祭」を令和 3 年（2021）から令和 7 年（2025）までを予定して行われている。令和 3 年度に記念式典・記念講演会が行われ【2-4-32】、令和 5 年度に大和地域の 4 小学校の 5・6 年生の児童が出演した創作オペレッタ「東氏ものがたり」公演を行っている。



2-4-32 記念式典・講演会のポスター

コラム 千葉家のいろり火

現在の郡上市明宝気良の地に居を構えている千葉家では、言い伝えによれば、先祖が承久3年（1221）に郡上郡山田庄を加領された東胤行の一族とともに来郡したといわれている。そして、先祖が焚き付けた囲炉裏の火を800年余り経た近年まで絶やすことなく守り続けていた【2-4-33】。現在は、千葉家から分火した明宝地域等の有志や道の駅明宝内にある施設にて守り続けられている。先に歴史的風致の活動でも紹介をした薪能「くるす桜」の際は、篝火を運ぶ「御燈移し」



2-4-33 千葉家のいろり火

が行われる際に、篝火の伝統の炎として「千葉家の火」を分火する。コロナ禍以前は郡上走友会の走者が、分火した千葉家の火をもって明建神社まで走って運んでいた。途中、謡曲「久留春桜」の写本を残した八幡町の村瀬家にあいさつをしていた。現在は、走友会の高齢化等により、車にて「千葉家の火」が運ばれている。